

# 平成22年度 博物館実習報告

## — 受講生のレポートから —

実習展について

文08-439 佐野 真美子

### 1、企画

#### a、テーマ決定

私達ひなまつり班が班を結成したのは、7月の終わりだった。夏休み中に数回、集合して、展示のテーマや具体的な内容について話し合った。

まず、メンバーそれぞれがやってみたいと思うテーマをできるだけ多く出して、書きならべた。その中でまず私達が注目したテーマは「通過儀礼」であった。そして、更にテーマを絞るために、どのような通過儀礼があるのかを各自調べた。調べた結果を持ち寄って話し合いをした時、メンバーそれぞれの出身地によって通過儀礼にも様々な特徴があることが分かった。私達の班のメンバーの出身地は比較的ばらばらであったので、それを生かして、展示によって通過儀礼の地域ごとの特色を表現するということが決まった。様々な地域（主にそれぞれのメンバーの出身地）ごとに、特徴のある通過儀礼を調査した結果、その中で最も地域ごとの特徴が顕著に表れ、興味深かったものが「ひなまつり」であったため、私達の班の実習展のテーマは「ひなまつり」に決定した。

ひなまつりについて調べていくうちに、昨今ひなまつりを人形を飾るなどして祝う家庭が減少してきていることを知り、実際、班のメンバーや私の周辺の人の中にも、自分の家でひなまつりを祝わない、という人がかなり存在していた。そのような現状をふまえて、私達はこの実習展を通して、来場者にひなまつりの意味をもう一度見つめ直してほしいと考えた。

#### b、展示品の検討

メンバーがそれぞれ自分の出身地のひなまつりについて調査した際、自分の実家や、知人の元に興味深いものがいくつかあることがわかったので、それらがまず、展示品として決定した。また、テーマについてさらに考えていくと、やはりひなまつりの歴史的な流れが分かる展示があったほうが良いということになり、それについて表現することのできる展示品を各自探し始めた。ひなまつりのもとになったとされているのは平安時代から行われていた「ひいな遊び」と、自らが持つ厄を代わりに祓うとされる「形代」であった。前者の当時の様子を表す展示品は、残念ながら見つけることは出来なかったが、後者の形代のほうは、現代でも神社で手に入れることができ、展示することとなった。また、関西大学博物館がひなまつりに関する資料を多く所蔵していることがわかり、その資料の中で、古今雛を一对借用することとなった。この人形は、作られたのは明治であるが、形式的には江戸時代のものであった。現代のような様相の雛人形になる前の段階

を表すため、展示品に加えた。メンバーの実家から借用する展示品は、天神人形や土人形、また雛掛軸だった。前者は、その地域独特のひなまつりの風習を示すために効果的であり、後者は雛人形を購入することができない家庭でも、代わりに掛軸などを飾ることで、子の健やかな成長を願っていたことを表すことに効果を発揮し、また絵の題材である神功皇后には流し雛・雛人形の起源とされた伝説があるので、そのようなことを表すことにも効果的であった。その他の展示品として、静岡県などでよく製作されている吊るし雛を班のメンバーで製作し、展示することになった。

## 2、準備

### a、展示品の借用

10月に入ると、実際に展示品を借用しに動き、展示室での展示の準備に取り掛かるようになった。まず展示品の準備について述べる。関西大学博物館所蔵の古今雛の借用については、割とスムーズに博物館の方とやり取りができた。また、土人形や天神人形も持ち主の方々の協力により、スムーズに借用でき、展示室に運び込むことができた。そして、雛掛軸についてだが、借用と展示室への運び込みの段階までは、こちらもスムーズに行うことができたが、一度、サイズなどの確認のために展示する予定だったケースに入れ、掛けてみると、考えていたよりも縦の長さがあり、床についてしまうということが分かった。かなりの大きさと重さのため、上部を巻いて展示することは危険であり、また巻いて展示したとしても、うまく本紙の部分を見せることができなかった。そのため、予定していた展示ケースには展示することができなくなってしまった。最終的には博物館の先生方が提案して下さったように、更に大きい展示ケースを借りて、そこに展示することになったが、元々展示する予定だったケースが空いてしまうことになり、展示の構成を考え直さないといけなくなり、計画の大幅な変更をしないといけなくなった。そのため大幅な時間のロスとなり、また博物館の先生方にご迷惑をかけてしまった。このようなことは、事前にもっとしっかりと、大きさなどを測り、シミュレーションしておけば防ぐことができたことなので、調査不足であったと反省した。この空いてしまったケースに展示するものとして、始めに考えたのは吊るし雛でしたが、このケースに入れるには一つ一つが小さすぎ、また先生からも、メンバーの手作りである吊るし雛は、ある種聖域である展示ケースに入れるべきではないとのご指摘があり、この案は廃止した。展示の構成に行き詰っていると、先生方が熱心に相談に乗ってくださり、追加で展示できるものをいろいろと教えて下さった。

一つ目は池田市立歴史民俗資料館が所蔵している雛掛軸である。これは立雛が描かれている掛軸で、人形を購入することができない家庭でも、代わりに掛軸などを飾り、ひなまつりを祝っていたということが分かるものであり、私達の展示のテーマを表現するのに最適なものであったので、すぐに借用の交渉に入った。電話でのやり取りの後、事前調査に向かい、借用・返却について日程などを調整、出陳承諾書などの書類のやり取り、大きさの計測、写真での記録を行った。その後実際に借用に向かった時に借用書を受け渡し、調書を取り、梱包を行った。この際、学芸員の方がなれない私達に掛軸の調書の取り方についてご指導して下さり、大変勉強になり、しっかりと作業することができた。

### • 掛軸の調書の取り方

- ① 掛けることができる状態のものならば、十分なスペースのある場所に掛ける。
- ② まず、表の状況の調書を取っていく。
- ③ 巻き取りながら裏の表具の状況などを記録していく。  
(②や③の時、所蔵者に汚れや傷、取り扱いなどについて、情報をしっかり聞いておく。)
- ④ 軸や巻緒の状態、入っている箱、付属品について記録する。
- ⑤ 写真も撮っておく。

次に、先生から、貝絵、絵雛そして立雛を借用させていただいた。貝絵は女性と迦陵頻伽の姿をした女性が描かれており、女性が迦陵頻伽のように音楽に優れた人物に成長するよという願いが込められているものである。また、これに使われている蛤は夫婦円満、良縁に恵まれるよという願いが込められているものであったので、同じく蛤の形をした、雛人形の供え物の飾りと共に、前述のような願いが込められているものとして展示した。絵雛は、雛掛軸のように人形を購入できない家庭が子供の成長を願い、飾っていたのものとして展示し、立雛は現在のひなまつりで飾られる人形の前の段階の一つとして展示した。

先生方のご協力とアドバイスにより、空いてしまったケースにテーマを良く表現できるような展示をすることができ良かった。しかし、先生方に頼り過ぎてしまったように感じる。もうすこし自分たちの力で問題を解決していきかけた。

### b、展示

展示品が揃うと、展示を随時行っていった。ここでも、先生方からの多くのアドバイスを頂いた。まず展示台についてである。私達ははじめ、形代を展示する際、円柱型の展示台を使用する予定であった。しかし、その展示台は基本的に宝飾品の展示の際に使われるものというご指摘を先生から受け、四角形の展示台に変更した。また、展示台の色についてだが、基本的にノーマルな白や灰色のものを使うと展示品が台に負けずに展示できるというアドバイスを頂いたので、白い展示台を使用することにした。ただ、展示品自体が白い形代はそのもの自体が見えやすいように、赤地の台を使用した。そして、古今雛は、実際にひなまつりの際に飾られるように、赤地の毛氈の上に展示した。また、池田市立歴史民俗資料館から借用した雛掛軸は、長さがケースよりも少し長かったので、そのまま掛けずに、上の部分を巻いて掛けた。

### • 上部分を巻いて掛ける方法

- ① 薄様を丸め、掛軸を巻く際に軸となるような筒を創る。(薄様の端は内部に丸めこみ、展示した際に見苦しくないよう整える。)
- ② 見た目の美しい紐を用意し、①の軸に通し、端を結び、輪を作る。(今回使用したのは紫色の布でできた平たい紐。)
- ③ 軸に掛軸の上部を巻き、②でつけた紐を掛け緒にして自在に書ける。
- ④ 軸のすぐ下の部分を紐と画鋏を使い補強。(掛軸に画鋏が当たらないように注意する。)

### 3、展示期間中

準備が始まり、展示が始まると、シフトを組み、メンバーで交代しながら、インタープリター

ションや、展示の管理を行った。その際、来館者の方から頂いた質問や意見などは一日ごとにノートに記録しておき、また、その日の終わりにメンバー全員にメールでその日あったことや質問されたこと、その質問にどのように答えたのかということ伝えるなどして、全員が情報を共有できるようにした。これは大いに役立ち、自分の当番のときに全員が多く情報を持ちながら仕事をすることができ、いろいろな変化や疑問にも素早く対応できた。

期間中に起こった問題としては、図録の内容、キャプションに大きなミスがあることが発覚したことである。急遽、図録の訂正、キャプションの作り直しを行った。ミスへの対応は素早く行うことができたが、このようなミスはそもそも私達の調査不足から起きてしまった事であり、もう少し入念に調査を行っていれば防ぐことができたものであった。準備中の事前調査が不十分であったと反省した。

#### 4、まとめ

企画から実際の展示まで全てを自分たちで行っていくということは、想像していた通り、やはりかなり困難が伴うものであり、準備期間中は様々なトラブルが発生したが、それらをメンバーで協力しながら、時に先生方のアドバイスを頂きながら、一つ一つ乗り越えていくと、そのたびに少しずつ成長していけたように感じる。今回の実習を通して、博物館業務の一部分を体験し、普段見学する展示会がどのような苦労や様々なステップを経て完成しているのかということが分かり、また、一つのプロジェクトをやり遂げる喜び、何かをやり遂げるには心強い仲間が必要不可欠なのだという事を改めて実感した。

## 博物館実習展を終えて

文08-456 柴原俊介

### はじめに

私は平成22年度博物館実習展において「栗おこし～なにわ菓子物語～」の展示に携わった。今回のレポートでは大きく「準備」・「展示」・「撤収」・「全体」の4項目に分類し、その中の各点について良かった点・改善すべき点を細かく見ていくことにする。

### 「準備」

#### ① 役割分担

##### 改善すべき点

準備開始当初の方針は「全員で決定し、全員が納得したことを行う」というものだった。しかし、時間的な制約もあり、途中から役割分担をして作業にとりかかった。しかし、各自が役割を越えて行動してしまったため、責任の所在が不明確になってしまった。また、各自の仕事量に大きく差があり、特定のメンバーに過度な負担がかかってしまった。さらに、このような方針転換を行ったにも関わらず、情報共有の場を確保しなかったため、各自の持っている情報が不明確になってしまったように思う。

準備に関して最も改善すべきと感じた点が作業計画の作成、スケジュールの把握・調整である。この作業を疎かにしたため、展示準備が遅れてしまい、展示直前には思うように動くことができなくなってしまった。展示を行うためには、優先順位を定めてその目的に沿った作業計画を立てるべきである。

#### ② 調査・研究・取材

##### 良かった点

電話でのアポイントメントや手書きでのお礼状作成など、丁寧に取材を行うことができた。また、承諾書や借用書についても問題を起こすことなくできたことは良かったと思う。

##### 改善すべき点

取材前に図書館資料を用いて深く研究を行うべきだった。そのような研究をしなかったことが後の展示解説における知識の不足、展示における軸、つまり「何を伝えたいのか」を十分に伝えきれないという結果に繋がってしまったと考えられる。また、取材前に一時的にでも展示の流れを定めていなかったこともその原因として挙げることができる。実際の展示までにその流れが変わったとしても、取材前に展示の流れを定めることで、取材の際に「何を聞くべきか」を悩むことなく、より円滑な取材・交渉ができたのではないだろうか。取材する機会が少なかったこともあり、取材の前の積極的な行動がとれなかったのが残念である。また、良かった点として、丁寧に取材ができたということを挙げた。しかし、形式も重要だが、もう少し臨機応変に行ったほうが良いと思える場面もあったように思う。取材先が多忙であったため、多少形式から外れても取

材回数を減らすといった対応策も考えなければならなかった。

### ③ 梱包・運搬・保管

梱包・運搬に関しては企業の所有物ということもあり、博物館や美術館ほど借用先から慎重さを求められなかったように感じる。しかし、調書や来歴の調査等は不十分だった。寸法の測り忘れや、はっきりしない資料の情報などが多かった。その結果、借用後に展示配置に悩んでしまった。また、保管に関しても多少荒さが目立ったように思う。粟おこしと書籍を一箇所で保管したり、工具を展示ケースに入れたりしたのはあまりに思慮に欠ける。また、借用資料の中で強度不足で展示に使用できないものがあり、展示開始前に返却を行った。そのような借用資料は本来ならばあってはならないので注意が必要である。

## 「展示」

### ① 展示資料

#### 良かった点

粟おこしの無料配布や粟おこしクイズなど、普段は博物館に関心のない人にも楽しんでもらえる内容を組み込んだ点。また、黒い布で覆う、キャプションの字体等は展示全体の統一を図れたので展示物を見やすくすることができた。

#### 改善すべき点

粟おこしそのものとは関係ないものも多く、展示が一つのストーリーとしては見づらいものになってしまった。また、展示品の数が多すぎたように思う。あまりに展示点数が多いと空間に余裕を感じられず、一つ一つの資料に注意がいなくなる可能性もある。しかし、展示点数に関しては「現代の粟おこし」のように、多くの資料を雑然と並べたほうが意図に沿う場合もあるので判断が難しいところである。しかし、今回の展示では多すぎるという感覚は否めない。また、実物展示が少なくなってしまったのも残念である。強度に問題があると判断したため、複製展示を行ったものが多かったが、その中にも取材先では実物も使用可能と言われたものもあった。そのため、実物を展示するための工夫をしなければならなかったと思う。取材先の資料館の職員に展示方法などの相談をしてもよかったのではないだろうか。そして、そのような工夫を行うためには時間に余裕を持って展示作業を行うことが必要とされるだろう。

### ② 展示管理（展示期間中）

#### 良かった点

開館前の準備、閉館後の片付けを担当者が責任を持って行うことができた。また、担当以外の者も時間があれば手伝いに来ていたため、スムーズな作業が可能となった。

#### 改善すべき点

両面テープで壁に貼っていた錦絵（複製）が展示時間内に落下した。そのため、翌日からは手で吊るという手法をとった。錦絵が落下したことから展示前の確認が十分でなかったと言え

る。また、展示の準備をする段階での強度に関するより深い理解が必要である。

### ③ キャプション・解説

#### 良かった点

質問された内容を各自がその日の展示終了後に全員に報告するようにした。このことによって、個々の質問に対する解説に矛盾が少なく、一貫した対応ができた。

#### 改善すべき点

私は展示解説において学芸員が来館者に付いて回るのは決して好ましいことではないと考えている。なぜなら、展示物を見ている来館者の集中力を削ぎ、研究機関としての「考える」という機能を失ってしまう可能性があるためである。また、博物館の「モノ資料」がその魅力を失っているように思える。しかし、それと同時に、そのような機能を果たすためには最低限の情報が必要であるとも感じた。実際、アンケートには「解説が積極的でないため展示物がどういったものなのかわからない」、「キャプションに説明が少なすぎる」といった意見があった。極端に情報を削ってしまったため、かえって「考える」ことが困難になってしまったのである。このような事態を防ぐため、キャプションには展示物の理解に最低限必要な情報を載せ、「学芸員の解説が無くても展示物とキャプションを見れば概ね理解できる展示」にすべきである。そして、質問された場合には学芸員が解説を加える、という方針で展示を行うのが最も博物館の理念に沿った展示方法であるように思える。

### ④ インタープリテーション

私は展示期間中に関西大学の1回生に集団解説を行った。

#### 良かった点

来館者の顔をよく見ながら解説できた。

#### 改善すべき点

まず、粟おこしの原料、製造に関して説明し、その後、展示ケースに沿って各時代の社会状況や文化・粟おこしの在り方について解説を行った。致命的な失敗は無かったが、やや独りよがりなインタープリテーションになってしまったように感じた。なぜなら、こちらが一方的に解説するだけで、来館者との対話は成立していなかったからである。そのため、まず「粟おこしを知っているか」という来館者への質問から入ることで来館者の注意を引きつけるようにしたかった。また、各時代ごとの概要説明は確かに必要だが、その説明内容に合致した展示物を挙げ、よりイメージの掴みやすいものにするすることで、より効果的な解説とすることができただろう。また、そのような説明をするためには知識不足や内容の軸の曖昧さも改善すべきである。

### ⑤ 図録・ポスター

#### 良かった点

図録は全体的にまとまったものにすることができた。各章ごとの字体・語調は統一がとれ、写

真の解像度、配置にも問題は無かった。また、梅の紋をアクセントとして用いることで印象に残るものになったのではないかと思う。掲載する展示物は少なくなりましたが、20ページという制限の中で読みやすいものにするためには適切な数であると思われる。また、ポスターは粟おこしを用い、梅の紋を用いるなど和の雰囲気を出すための工夫ができた。

### 改善すべき点

メンバーの名前・調査内容に関する記述・参考文献など、掲載内容に誤りが非常に多かった点である。今回は学内での展示ということもあって差し替えることができたが、実際の博物館展示では一度販売されたものの訂正は困難である。そのため、より注意深く内容の確認・校正が必要である。

### 「撤収」

#### 良かった点

展示期間前に借用先と連絡をとり、無理のない日程で返却を円滑に行うことができた。また、お礼状も取材時や招待状と同様に手書きで送り、丁寧にできたのではないかと思う。

#### 改善すべき点

撤収の際、多くの展示物を展示ケースから同時に取り出した。しかし、展示物の保管を第一に考えるのであれば、一点一点ずつ扱うべきである。また、今回は雨天時に返却は行わなかったが、雨天の場合の対策も考えておく必要があった。

### 「全体」

良くも悪くも「まとまった展示」になった。全体として統一がとれた展示になったと思う。しかし、学生が行う実習展であるということを考えると失敗を恐れずに工夫をするという姿勢も必要だったのかもしれない。

### おわりに

以上が良かった点、改善すべき点である。ここからは博物館実習展を終えての感想を述べていきたいと思う。

改善すべき点を多く挙げたが、「粟おこし～なにわ菓子物語～」は班員各自ができることを精一杯した結果なので、現在の私たちにとっては最高の展示になったのではないかと思う。勿論、全てが順調に進んだわけではない。取材をすること自体初めてだったうえ、承諾書や借用書の作成など、全く経験の無い状態でのスタートだったので戸惑うことも多かった。また、展示物の運搬や保管にも不安があり、気づかなかったものも含め、数え切れないほどの失敗をしていることだろう。そのため、多くの人に迷惑をかけてしまった。しかし、そのような状態でも、教授や博物館事務室による指導、総合図書館や粟おこし販売企業・資料館の力強い協力によって、展示を無事終えることができた。協力して頂いた方々に深く感謝したい。

また、七月に初めて会った班員と協同作業をするのは難しかった。班員それぞれにこだわりが



あり、意見が対立するようなこともあった。展示準備中は忙しく、思うように作業ができなかった人も多かったのではないだろうか。しかし、個人の考え方の対立も時間の制約もあって当然のものである。そのような中で展示構想が洗練されていったのだと思うし、週2回のミーティングや展示作業は、大変ではあったが楽しく行うことができたと思う。そして、実習展も現段階で最高のものになった。私は実習展に携わることができて本当に良かったと思う。

## 展覧会における「デザイン」とは

文08-989 八木 英莉子

### はじめに

デザインと生活はもはや切っても切り離せない関係である。マスメディアを彩る広告のみならず、わたしたちの日用品もすべて人の手でデザインされたものだ。もちろん、博物館の展覧会においても、デザインされたものが必要となる場合は数多くある。

先日の博物館実習展において、わたしは化粧班の一員として、ポスター、図録の表紙、パネル等、視覚に訴える役割があるものを数多く担当した。わたしが携わったもの以外にも、班の展示は文字よりもビジュアルに依存したものが非常に多かった。個人的にはこういった展示もよいのではないかと思う反面、もう少し文字を使うことで来館者にわかりやすい展示にするべきではないかという想いもあった。

こういった点に関しては講評においてもご指摘をいただき、反省点として見ることができたのだが、このレポートでは確認や反省の意味も込めて、博物館での展覧会におけるデザインの役割について考察していきたい。

なお、このレポートにおける「デザイン」とは、基本的に印刷物におけるグラフィックデザインとする。

### 1. ポスターのデザインについて

展覧会のポスターのデザインとは、間違いなくその展覧会の「顔」と言ってもいいだろう。

たとえば、ポスターでひと際大きく取り上げられている資料は、言うまでもなくその展覧会のメインである。その資料には当然人が集まることとなる。つまり、メインとなる資料を展覧会の構成や、ターゲットとする客層などから吟味しなければならない。このような、一点の資料を強調する手法は、都市部の大きな美術館や博物館で開催される大きな美術展や、国宝級の仏像が展示される展覧会などでよくみられる。

個人的には2010年度に京都国立博物館で開催された長谷川等伯展、サントリーミュージアムでの印象派展、国立国際美術館でのルノワール展、2009年度に京都国立近代美術館等で開催されていたファッション展のものが記憶に新しい。

いずれの展覧会にもポスターに惹きつけられて足を運んだのだが、やはりポスターでメインに据えられている作品は集客力が強く、じっくりその作品を鑑賞できたことはほとんどなかった。

メインとなる展示物が複数ある場合や決定し難い場合は、複数の展示品あるいは展覧会イメージに沿った写真等をポスターに採用してもよい。こちらの手法は前述の大規模な美術館ではなく、比較的小規模な私立の美術館や博物館、また、個人のコレクションを並べているコレクション展にて多くみられる。

細見美術館の「中国の小さなやきもの」展や、大阪歴史博物館にて開催されていた「昭和のおもちゃとマンガの世界」展、大丸神戸店での「琳派 若冲と雅の世界」展などでこの手法が使われていた。

いずれも（展示ケースなどでメリハリはつけられていたが、資料それぞれの一般的な知名度などにおいて）小さな資料が数多く展示されていた展覧会で、一見した印象でもメインとなる展示物は決め難く、展示を見る際にもどの資料を中心に見るべきか迷った。

だがそういった反面、どれもメインと言うこともできる。特に「琳派〜」展には、伊藤若冲の『雪中雄鶏図』や神坂雪佳の『金魚玉図』が展示されていたのだが、ポスターやチケットのビジュアルにおいて大々的に使われていたわけではなかったので、現地に行くまでその作品が展示されていることを知らなかった。私はポスター等、事前に得た展示作品情報をもとに展覧会を見に行くことが多いのだが、その展覧会に限っては事前情報をほとんど得られなかったので、上に挙げた作品だけではなく、その他のものにも目を向けることができ、非常に新鮮な気持ちで展覧会を楽しむことができた。

今回の実習展における、「化粧から化SHOWへ」展において、手法は主に後者のものである。使用した写真は、家にある私物の化粧品を並べて撮影したものであるが、これを利用した理由は展示物が決定していなかったことと、展示の方向性が決定しきっていなかったことが主な要因である。現にポスターのビジュアルに使用した写真は私物の化粧品を撮影したものであるが、主な借用先であったクラブ化粧品の商品はひとつもないし、現在使用しているものなのでその後の展示に使用したわけでもない。

また、ポスター締切後に展示テーマが変更となり、それに併せてポスターのデザインも急遽変更することとなった。変更前のテーマ「化SHOW!」と変更後の上記のテーマとではニュアンスが異なったための判断であるが、その影響で実質ポスターのための作業時間は数時間のみであった。短時間でポスターのコンセプトが決まり、すぐに作成できたのは幸いであったが、やはり制作時間の短さに起因するポスターのクオリティの低さは否めない。展示資料が写っていないこともあって、説得力が弱い。このポスターを見てお客さんが来てくれるのかは、客観的に見てもはなはだ疑問である。

一般の博物館のポスターのデザインや上記の一件から、展覧会においてはいかに資料を迅速に決定、借用してくるかが大切であると実感した。ポスターの資料に興味を持ち、来場を決めるといふ人は多いだろう。そのことから、ポスターに資料を使用するのとしないのとでは、ポスターの説得力の強さがまったく違って来る。そして、それは来場者数にも直結する。

説得力が高いことに越したことはない。どんな大きさでもレイアウトでもいいので、ポスターに実際に展示する資料を使用することには、館側にとっても来場者側にとってもデメリットはないだろう。積極的にしていくべきである。

## 2. 展示ケースの中のデザイン



展示ケースの中においてグラフィックデザインが影響してくる場所はキャプションや説明のパネルである。

言わずもがな、この両者にはデザイン性よりも見やすさ、読みやすさが求められる。

実習展において作成したキャプションは左図のものである。背景と文字の明度差を大きくして読みやすさを重視し、そこに色や

枠などで視覚的なアクセントを取り入れた。モノクロでは物足りず、展示ケース内のパネルが派手であったので、埋没しないためにこのような形にしたが、そもそもこのキャプションのサイズ自体が6×4と比較的小さく、説明文も少ないスペースに無理矢理入れ込んだようなものなので、果たして展示品の説明という働きをまっとうしていたかは定かではない。現に講評にて「展示だけではわかりづらい」とも言われており、もう少し大きめの、シンプルなキャプションにすべきであったとも言える。ケース内の主役は展示品なので、あまり派手なものであるのは好ましくない。「博物館の展示というよりアートの展示である」といった講評もいただいたが、その要因のひとつにこのキャプションがあるのかもしれないと感じた。

ただ、前述したとおり、そのそも展示ケース内がごちゃごちゃしていたため、ある程度目を引くキャプションである必要もあるのではないか。キャプションは来場者に読んでもらえなければ意味がないと思う。

いずれにせよ、キャプションと資料、パネルとのバランスを考慮し、資料を引き立てつつも展示ケース内で埋没しないキャプションを作る必要がある。

また、展示ケース内のパネルにも同様のことが求められる。



左図のパネルは、実際の展示通りに展示品を並べた写真をトレースし、色を付けたものである。見やすさを重視して作ったので、資料を引き立て、同時に説明を見せるという意味では、役割をきちんと果たしていたように思える。しかし、資料に振り当てた番号と下にした説明の位置が逆（資料の1番が右上、説明の1番が左上）であるため、視線を動かさざるを得ないという指摘があった。全くその通りであり、図のようなままでは視線を移動させる際のわずらわしさがどうしてもぬぐえない。この展示ケース内の展示品が非常に多く、作る側としても展示品を把握しきれなかったことも影響しているのかもしれない。

以上より、キャプション・パネル共、デザインという視点ではなく、来場者の視点に立つて作ることが必要不可欠である。これは読みやすさというだけではなく、視線の動き方にまで気を配る必要がある。このため、キャプションやパネルは完成までに複数の人の目を通すべきである。

### 3. 図録におけるデザイン

以上に挙げてきたポスターやキャプション、パネルよりも、図録は比較的自由的なデザインの余地があるように思われる。冊子形態であることから、表紙、本文、内容に至るまで自由にできるのである。しかし図録は、その展覧会の記録というだけでなく、展示について掘り下げたいという来場者にとっては重要な資料であるため、ある意味、展示以上に作り込む必要があるということもまた事実である。

ここでは図録の表紙のデザインに焦点を当てていきたいと思う。と言っても図録にはポスターのように広報的な意味合いはなく、展示資料を引き立たせるといった必要もないため、ポスターの流用などで事足りる。

実習展においては資料が手元にあったため、表紙には資料の写真を使用してポスターとは異な

る新たなものを制作した。ポスターと関連性を持たせようと、ピンク地に化粧品をコラージュしたものにしたが、「派手すぎる」という意見をいただいた。もしもポスターのデザインを流用していたらこれがどうなったかわからないが、その展覧会に合ったものにするのが重要であると感じた。

## おわりに

展覧会の主役はあくまで展示資料である。学芸員はそれを引き立てるために展示を組み立てるが、その展示は人に博物館まで来てもらって、さらに展示に興味を持ってもらうことが必要不可欠である。そして、興味を持ってもらうためにポスター、展示に惹き込むためにキャプションやパネルが存在するのである。

だが、博物館での展覧会の主役は展示資料である。つまるところ、展覧会におけるデザインには学芸員の意図をうまく盛り込むようにしなければならない。展覧会のポスターのデザインやパネルのレイアウトをデザイナーに任せるにしろ館ですべてやるにしろ、それは絶対である。

博物館での展示に関わる際は、それがいかなる仕事であろうとも、職業が学芸員でなくても、学芸員の一員として携わるというくらいの意気込みを持つことが大切であると感じた。

## 教員と博物館

文07-324 木村洋平

今年度、私は「博物館実習」を履修した。この授業では自然、美学、民俗学、歴史学、考古学など、各ジャンルの博物館学芸員の方によるご指導のおかげで、資料の扱い方、博物館の役割、博物館の現状などを学ぶことができた。また、この授業では平常授業以外にも、日曜日を利用した博物館見学会が行われた。そこでは、専門分野である考古学系の博物館の他に、自然系や科学系の博物館を見学することができた。この見学会において、改めて博物館の種類の多さを実感するとともに、専門分野外の博物館のもつ“面白さ”に気付くことができた。中でも、大阪市立科学館において展示されていた、アインシュタインの相対性理論はとても印象に残っている。これらなどの講義や体験も、実際に“本物”の学芸員の方と対面し、生の声を聞くことができたため、博物館の今をリアルに感じることができた。

これらの授業や博物館見学が私にとって有意義な経験となったのは言うまでもない。しかし、博物館実習の中で最も良い経験となったのは、11月に行われた実習展であった。この実習展では、テーマの立案、資料の借用、資料の配置、展示ケースの環境設定、キャプションの校正、図録の発行、インタープリテーション等、展覧会を行う上で必要な全てのことを経験することができた。

経験することができたのは、それだけではない。学芸員として酸いも甘いも味わうことができた。素人の学生たちによって行われた実習展は、当然ながら全てが上手くいくわけではない。例えば、インタープリテーションを通して、観覧者の方に意図したことが伝わらないことが多々あった。当時は、1つのことを伝えるのにこれ程苦勞するとは思っておらず、この仕事の“難しさ”を肌で感じる事ができた。一方、意図したことが伝わったときは“やりがい”を感じ、また作業の“楽しさ”から、学芸員という仕事に魅力を感じることもできた。

このように、博物館実習は、これまで受動的に受けていた他の授業とは全く違うものであった。そこでは自ら積極的に考えて動くことが要求され、能動的な姿勢が鍛えられた授業であった。

そもそも、私が学芸員資格を取得しようとしたのには理由がある。そして、それは、これから関わっていく教員という仕事に関係がある。※今年度の大阪府によって行われた地理歴史科(日本史)の教員採用試験に合格したため、2年後には教員となることが決定している(2年後としたのは、大学院進学を志望したためである)。私は地理歴史科の教員として、生徒により多くの資料に触れさせたいと考えている。そのように考えているのは、自身の経験がきっかけである。

それは日本史の授業で土師器と須恵器の違いを教わっているときであった。当時高校生であった私は、それぞれの違いをいまいち理解できずにいた。教科書には、それぞれの色や硬さの違いが記されていたのだが、文章や資料集の写真を見るだけでは分かりにくかったのである。そのようなとき、先生の指示により、実物の土師器と須恵器を博物館で見学したことがきっかけで、その違いを理解することができた。実物を視覚・触覚を用いて、触れることで、資料集以上の情報を主体的に手に入れることができたのである。

このように、実物の資料に触れることは、本で見るよりも多くの感覚を刺激し、尚且つ主体的に物に対して考えるよう促すことができる。私は、地理歴史科を通して生徒の想像力を伸ばした

いと考えており、そのため、生徒の興味・関心をひきたてることは必要不可欠である。そして、学校という実物資料が乏しい場所にいる生徒とそれを近づけるには、博物館との連携・融合が効果的である。その際、学芸員資格を持っていることで、より効果的な指導が行えると考えた。これこそ私が学芸員資格を取得しようとした理由だ。

さらに博物館を利用した学習は、2000年改訂の学習指導要領によっても、その必要性が明記されている〔文部科学省2002〕。そこでは、日本史Bの「2 内容とその取扱い (1) 歴史の考察、(ア) 歴史と資料、(イ) 資料に触れる」という項目において、「博物館などの施設や文化遺産についての関心を高め、文化財保護の重要性について理解させる」と示されている。

「(1) 歴史の考察」は、作業的・体験的な学習活動を重視した内容を明確に示したことが特徴である。ここでは、「生徒の主体的な歴史学習を進める場合には、様々な歴史的資料のもつ価値や特性を生徒自身が理解した上で、それらの資料を用いることが必要である」、「この科目は、様々な歴史的資料をもとに歴史を調べ考える作業的、体験的な学習活動を重視しており、この学習活動を通して歴史的な見方や考え方を身に付けることにつながることを期待している」とした。

そこで、歴史の学習の基礎的な認識を深めるために歴史的資料の用い方を体験的に学習させる必要があることに言及し、「(イ) 資料に触れる」では、文化財保護の重要性を理解させるために、博物館や地域の文化遺産を扱うこととした。また、日本史学習では、「文化財保護への関心を高め、地域の文化遺産を尊重する態度を養うこと」も期待されている。

ここでは、「歴史にかかわる文化施設や地域の行事と連携した歴史学習を従来以上に進めること」が望まれており、博物館との連携に対する力点が強まった感がある。

このように近年の一連の教育改革において示された「新しい学力観」は、旧来の知育編重を改め、自己教育力を育成する教育、つまり興味・関心、意欲、思考力、判断力等を重視する方向へと変わってきた。こうした背景から、社会教育施設と学校教育の連携、いわゆる学社連携が叫ばれ、今日では学社融合へと進展してきた〔大堀 1997〕。そのため、今日の学習には博物館との連携が必要不可欠である。そこで、教員と博物館をつなぐために役立つのが、学芸員資格であることは言うまでもない。

以上のように、生徒と実物資料に触れあわせたいという個人の願望と、社会の要請に応えるためには、学芸員資格を所持していることが必要であると考えたため、私は学芸員資格を取得しようと考えた。

しかし、博物館と連携・融合するといっても、実際のところどのようにすれば良いのか分からないのが現状である。さらに、教育現場においては、「博物館の利用が教育上有益であることは分かっているが時間の余裕がないので、利用は困難である。現状では遠足、社会科見学で年に1回程度利用するのが精一杯である」〔大堀1997〕という実態がある。では、現在、学校と博物館ではどのように連携・融合されているのか。そこで、参考にしたいのが、以下の取り組みである〔大堀 1997〕。

1つ目は千葉県教育委員会の取り組みである。千葉県では、早くから県教育委員会が、小・中学校および社会教育関連・団体を対象とした「博物館・美術館利用の手引き」を作成し、博物館へのアクセスをはじめとする利用方法や事業計画・各博物館の概要や展示等の特色を掲載するとともに、博物館・美術館の利用のあり方について、事前打ち合わせ、ノートの利用などを含め、学

校教育と社会教育について、それぞれ利用の定義、利用の事例等を掲載して参考に具している。

2つ目は欧米の取り組みである。例としてイギリスの大英自然史博物館をあげる。まず、イギリスの博物館全般に言えることは、「学校に対する博物館の教育部が充実している」ことである。そして大英自然史博物館には、Teacher's Centerが設置されており、ここでは「教師自身が博物館の資料を用いて研究する際の方法について相談したり、児童・生徒を引率して博物館を効果的に見学するために、事前に学習したり打ち合わせをしたりする」ことができる。

3つ目は、博物館学芸員による学校での出前授業の取り組みである。博物館と学校のこれまでの関係では、学校が行事の一環として博物館を訪れる場合が多かったが、校外学習のための事前学習として博物館を活用した後、「校外学習のまとめの段階で博物館学芸員による授業展開を学校内で行うという方法」がある。博物館学芸員は、地域の専門家として発表に対するアドバイスやT・T(ティームティーチング)スタッフとして教員と協力して、学習支援を担当することにより、より一層効果的な授業運営が可能になる。

最後は、博物館貸出資料を用いた授業展開の取り組みである。博物館の中には、国立科学博物館のように、教育普及活動の一環として館で開発・作成した実物標本資料を、主に学校や博物館等社会施設への貸出事業を積極的に行っているところもあるが、そうでない博物館のほうが多いのが現状である。貸出しを利用する際は、例えば、①資料をただ漠然と観察するのではなく、観点を決めて観察するようにする、②それぞれの資料の共通点・相違点を観察によって気付くよう発見的に取り扱う、③気づいた点をもとに十分話し合うなど、生徒の学びを深めるために授業のねらいを決める必要がある [大掘 1997、一部改変]。

なお、参加体験型展示を利用した博物館見学やティーチャーズセンター等を利用する教師の研修も重要な取り組みであることを、ここに触れておく。

このように、学校と博物館の連携・融合には、いくつかの種類があることがわかった。しかし、いずれも積極的に取り組み出され始めた段階で、まだまだ普及していないのが現状である。

なお、これらの博物館と連携した学びをより実りあるものにするには、授業を計画的に進行する必要がある。以下は、その指導を事前、当日、事後の3段階に分けたものである [大掘1997]。

## 1 事前指導

- ① 学習単元への興味・関心を喚起し、具体的学習課題を認識させるために、学習の導入段階で実施する。
- ② 学習問題を解決するために、問題解決の段階で実施する。
- ③ 学習問題の大筋は解決され、学習のまとめの段階で実施する。

## 2 当日の指導

- ① 学芸員の指導は児童・生徒に理解されているか。
- ② 説明を聞く、ノートを書く、観察する、体験する等メリハリのある活動が行なわれているか。
- ③ 見なければならぬものを、興味を持って観察しているか。
- ④ 学芸員あるいは教師が、児童・生徒の中に入って積極的な意欲を導き出す指導をしている



か。

- ⑤ 学校を離れて開放的になり、学習に参加できない児童・生徒はいないか。
- ⑥ 身体的な不調がみられる児童・生徒はいないか。
- ⑦ 危険行為をする児童・生徒はいないか。

※引率者として教員が心がけることは、生徒を博物館に連れて行っただけで「自分の役目は終わった」と考えない、生徒に教えこむのではなく、支援する姿勢を持つ（生徒に気付かせる）といった点が挙げられる。

### 3 事後指導

見学によって得られた情報や体験した内容を、整理したり、交換したり、発表したりする場を設定することが必要である。場の設定の仕方は発達段階によって異なるが、絵に描く、作文、感想文、写真展示、表やグラフにまとめる、工作する、劇をする等が考えられる。ここで大切なことは、見たから終わってしまうのではなく、見学をしてそれらをまとめ、整理することによって新たな疑問や問題が生じ、その解決のために学習活動が展開されるように配慮することである。

このように、博物館を教科指導の一環として利用するならば、博物館に来る前の「事前の学習」と「博物館での学習」と学校に戻ってからの「事後の学習」の内容が連続していなければならない。そこで、初めて博物館を利用した学びが充実したものとなってくるであろう。

以上、学芸員資格取得を目指した理由と、学校と博物館の連携・融合についてみてきた。博物館との連携・融合については、教える立場から関わったことがないので、戸惑うこともあると思う。しかし、教員となってからも、学芸員資格を取るに至った初心を忘れずに、学校と博物館の連携・融合を試みていきたい。

最後になるが、私はパスポートを手に入れたと思っている。それは最終授業で山口卓也先生が言った、「学芸員資格は博物館に就職するためのパスポートである」という意味でのそれではなく、教員となる私にとっての学校と博物館をつなぐためのパスポートである。今後も博物館に足を運び、学び続ける姿勢を貫いていきたい。

#### 引用・参考文献

大掘哲編『教師のための博物館の効果的利用』東京堂出版 1997

高橋隆博・森隆男・米田文孝『博物館学ハンドブック』関西大学出版部 2005

文部科学省「地理歴史編」『高等学校学習指導要領解説』2002

## 学芸員に大切なこと

10M-2051 岡 部 美沙子

学芸員には何が必要なのだろうか。博物館実習の授業を通じて、あるいは先生方のお話を通じて、私はずっとその答えを考えていた。

現在、学芸員の職は狭き門で、志望したからといって全員が就ける仕事ではない。さらに指定管理者制度の導入によって、今まで以上に厳しい職場になってしまった。たとえ学芸員になることができても、正規の職員ではなく、在職期間の限られた非常勤職員であったりする。学芸員の職は専門性が求められるものであり、そのためには研究の積み重ねが必要なのだが、これでは、研究の成果が出るより先に期限切れになってしまう。

しかし、こんな状況下であっても、学芸員の仕事には大きな魅力があると私は思う。

まず第一に、学芸員は貴重な資料に直接向き合い、その研究ができることが挙げられる。私はまだ修士課程の学生に過ぎないが、そうではない、指導をしてくださる教授方でさえ、研究に必要な資料は、高い交通費と時間をかけて見に行かなければならない。もちろん交通費は補助が出るだろうが、時間は補助などない。そうして時間を費やしてでも資料を見に行く、それが大学の研究者の置かれている状況なのではないだろうか。

しかし、学芸員は違う。学芸員はどこかに行かずとも、自分が所属する博物館施設に研究対象があるのだ。これは、本当に魅力的なことだと思う。

何人かの先生方が、博物館実習の授業の中でおっしゃっていたが、「資料そのものが持つ情報」は、決して少なくない。そして、資料の価値とも言える「情報」は、本やインターネットで見ただけでは、その全てを知ることはできないのだ。

私は昨年、初めて資料調査で、研究に関する資料を実際に見に行く機会があった。その資料は、沖縄県の重要文化財に指定されている、自了筆『白沢（はくたく）之図』である。県の重要文化財に指定されている絵画であるため、当然、関連する書籍は数多く出版され、それらには写真も掲載されている。そのため、私は資料調査の必要性を全くといっていいほど感じていなかった。しかし、指導をしてくださる先生が、論文を書くならばきちんと本物を見て、調査してくるべきだと強く勧めてくださった。

そこで実際に調査に行ったのだが、まず第一に驚かされたのは、資料の「色」だった。私がそれまで本で目にしていた『白沢之図』の背面の色は、肌色とベージュの間くらいの色だったが、なんと実物は灰色だったのである。

本に載せられている写真のほうが鮮やかな色になっているのは、それが人工的に見やすく調節されているからだったのだということを、そこで初めて知った。

また、写真ではわかりにくい絵の細かい部分も、自分の目で実物を見ることで、きちんと把握することができた。

この経験は私にとって、本当に衝撃的なことで、今まで様々な博物館に足を運んできたが、自分の研究とも特に関係もないため、ただ受身的に、展示されている資料を見ていたのだと気づかされた。そして、それと同時に、資料そのものが持つ情報は、こちらに読みとろうとする意識が

あれば、いくつも発見することができるのだとわかった。

このことを踏まえると、いつでも（実際にはそうはいかないのかもしれないが）、本物を見ることが出来る学芸員は、資料研究の点で、いかに優位な立場にあるのかがよくわかる。

もう一つは、学芸員は資料の面白さ・資料の魅力を多くの人々、特に一般の人々に知ってもらえる機会に恵まれているということだ。

通常展示はもちろんのこと、特別展やそれらの図録、講座など、自分の研究の成果を、分野・年齢を問わない様々な人たちに知ってもらうことで、自分が研究している資料の魅力や価値に気付いてもらえるのだ。さらに、地域の文化や歴史と密接な博物館であれば、その地域の良さにも改めて気づいてもらえるかもしれない。その役目を学芸員は負っているのであり、そこには多くの負担もあるかもしれないが、自分が歴史や文化に貢献することができると考えれば、それはとても魅力的なことだと思う。

このように、私が思う学芸員の魅力を二つほど挙げてみたが、では、そんな魅力溢れる仕事をする上で、学芸員には何が必要なのだろうか。その答えは、私たち学生一人一人や先生方それぞれで違うかもしれない。地道な努力の積み重ねや、資料の意味を見出す発想力、或いは人々と接するのだから当然コミュニケーション能力だという人もあるだろう。もちろんそれらはどれも必要なことだ。

けれども、私がこの一年を通して一番必要だと感じたのは「配慮」だ。資料に対してだろうが、人に対してだろうが、配慮することが絶対に必要なのだ。

例えば、資料についていえば、壊さないように配慮し、劣化しないように配慮し、汚さないように配慮し、展示方法・扱い方に配慮し、研究方法に配慮し、最新の研究に配慮し、資料の将来に配慮する。

人に対してもそうだ。来場者に配慮し、子供やお年寄りに配慮し、障害を持った方に配慮し、寄贈者に配慮し、資料の所有者や或いはその遺族に配慮し、資料の貸借をする相手方に配慮し、研究者に配慮し、運搬・展示業者に配慮する。

そしてさらに、現代では自然や環境にも配慮する。「配慮」無くして、学芸員、ひいては博物館の運営までもが全く成り立たないのだ。

先ほど述べた私の初の資料調査では、実はこの「配慮」という点でも私に衝撃を与えた。

私は博物館実習で、資料の扱い方については最低限のことは教えられていたし、資料を扱う際の服装や身だしなみもきちんと心がけていた。平らな靴を履いて、腕時計やアクセサリは付けず、髪もしっかり結って、「さあ、後はお手洗いで手を洗えばオッケー」という状態で所蔵先に着いた。その所蔵先には先生方と一緒に伺ったのだが、先生方は慣れた様子で先方と挨拶をして名刺を交換なさっていて、一向にお手洗いにいく気配がない。先生方が挨拶をしているのに、「お手洗いにっていいですか」と口を挟むわけにもいかず、それが終わるのを待っていると、そのまま口を挟む間もなく、資料を拝見する部屋へ案内され、担当の方の説明が始まってしまった。そして担当の方は説明が終わると、「ご自由にご覧になってくださいね」といって、資料を取り出してきてくださった。「どうしよう、まだ手を洗っていない」と私が内心焦りだしたその時、なんと先生方は靴からウエットティッシュを取り出したのだ。見れば、担当の方も同じくウエットティッシュを手にはしていないか。

考えてみれば、資料と水は相性が悪いのは当たり前で、お手洗いも当然資料を見るような部屋から離れているに決まっている。或いは、ちゃんとした施設でないところに資料を調査に行くとしたら、お手洗いなど無い場合だってあり得るのではないか。

私は結局先生にウェットティッシュをもらって手を拭いたのだが、この時、配慮が足りなかったと感じた。それは、ウェットティッシュを持っていかなかったことについてもそうなのだが、それよりもむしろ、初めて資料調査に行くというのに、普通の資料調査がどのように進行し、特にどんな持ち物が必要になるのかということ、事前に先生に詳しく聞かなかったことが悔やまれた。

配慮する、と一言と言っても、とても難しいことなのだと思う。しかし、何の経験がなくても、配慮するという事は努力すれば誰にでもできることでもあるのだ。

もう一つ、配慮が足りなかったと思うのは、博物館実習の実習展の順路・導線についてだ。実習展後の先生方からの講評では、私の所属していたたばこ班は、「導線が悪い・入口がわかりにくい」と言われることが多かった。

けれど講評を聞いた当初、私はそのことについて反感を抱いた。円形の展示室で、入って左側から栗おこし、化粧、たばこ、浮世絵、ひなまつりという順で展示が並んでおり、与えられた展示ケースにはその順番でA、B、C、D、Eと番号がふられていた。この順番で先生方の講評も用紙にまとめられていることから考えても、それが決められた順番なのだと思うのは当然のことだ。実習展のアンケートを作る時も、その順で展示を見ることを前提として作った。そこでたばこ班はその順番が全体の導線の流れになると考え、来館者が化粧班を見てからたばこ班の展示に来ることを想定し、展示の入口を化粧班側に設けた。

しかし、実際に実習展が始まってみると、何よりも目を引いたのがひなまつり班の雛掛軸で、来場者はまずそこに足を向けてしまうのだ。アンケート用紙を入口で受け取った人や、もともと展示されていた瓢箪から見始める人は栗おこし班から、雛掛軸に目が行ってしまった人はひなまつり班から展示を見ていき、一つの班を見終われば、当然その隣の展示に移る。すると、五つの班の真ん中にあるたばこ班は、化粧班と浮世絵班の両側から人が入ってくるのだ。

私たちの未熟な展示でも、一応流れを考えて展示してあったが、それには二つの入口などあるはずがなかった。その上、化粧・浮世絵両班とも、班の人たちが意図する導線通りに展示を見ると、次に連なるたばこ班の展示の、私たちが意図する入口には繋がらないような導線になっていたのだ。

そのため、講評を聞いて、「なぜ先生方は、自分たちの班のことばかり考えて、全体の導線を意識していない他の班ではなく、たばこ班ばかりにこんなことを言うのだろうか」と疑問に感じだし、ひどく落ち込んだ。

不平はもう一つある。展示ケースの中に使う展示台が、早い者勝ちだったために、金曜クラスの班ばかりが先にいいものを選んでしまって、唯一土曜クラスのたばこ班は、展示台がほとんど残ってなくて自由に選べなかったにもかかわらず、講評では「もっと展示台を使ってメリハリのある展示にすると良かった」と言われた。

けれど、むしろ今は、そもそもはっきりと入口がわかるような展示をしなかった私たちに配慮が足りなかったと思うようになった。展示台についてもそうだ。条件が悪いなら悪いなりに、ダ

ンボールで展示台を手作りするなどして、もっと工夫すればよかったのだ。

展示は決して、自己満足のためのものではない。見る人の立場に立って考えられたものでなければならないのだ。面白い展示を追求するばかりではなく、見やすい展示を心がけなければならない。もちろんそこには、見る人よりも、資料を傷めないことを優先しなければならないという条件が付くが。

博物館実習は、一年間という他大学では考えられないような、充実した内容になっていて、そのため、他大学で資格を取り人よりもはるかに実践的な知識が身についたと思う。しかし、実際に学芸員になるためには、それでも不十分で、これからも努力と学習と、そして配慮が必要になるに違いない。

## 「たばこ」というテーマの展示

10D-2007 岩田陽子

### はじめに

「たばこ再考」の展示に対する評価は非常に厳しいものであったと認識している。「関西大学博物館実習展（講評）」には、「全体の構成がよく理解しきれない」「解説の字の大小、ラベルの構成にもやや難あり」「展示資料も存在感が薄い」等が記載されており、「たばこ再考」という展示の問題点であったと思う。

一方、「説明もどこかの丸写し」「肖像権・著作権処理はどうするのか」「出口・入口は動線障害をおこしている」という講評には、納得がいかない部分もあるが、自分自身が展示を客観的に見る時、やはりこの展示において改善しなければならなかったと感じる点は数えきれないくらい存在した。本稿ではそのような結果となった実習展の準備過程を振り返ることで、改善点を明らかにしたい。

### 2、班編成とテーマ選定

たばこ班は3回生から院生までの幅広い学年の17名で構成されていた。班長は院生の山脇君で、私の担当は会計と「JT」や「たばこと塩の博物館」との交渉であった。班長もそうであったようだが、私の目標は班が分裂しないということで、その中でできるだけ良い展示ができればと考えていた。それ故に、「ポスター」「パネル」「図録」などの責任者は決めるが、作業は全員で行うという形式を採用した。このことにより、私たちは、資料借用の交渉、図録の解説、展示の解説、パネル作り、展示など全ての工程を担当することとなった。各々納得いかない点もあったかと思うが、私はこの方法のおかげで、最終的には班が空中分解することを防ぎ、団結することができたと思う。

私はテーマを決定する日は欠席したため、後から「たばこ」というテーマになったことを聞き、賛否両論の別れる非常に難しい主題であると感じた。さらに、準備段階で、「たばこ」に関連する資料を借用することの難しさを痛感した。借用リストを作成するために関西の博物館・美術館の目録に目を通したが、どこの博物館からも近世の資料などの借用はできないと断られた。今、振り返ると断られるのは当然のことだと思うが、資料を借用するということがいかに重大な責任を伴うことなのか、理解していなかったと思う。

結果として、東京実習で「たばこと塩の博物館」を訪れ、広告パネルやパッケージのレプリカを郵送で借用させて頂いた。しかし、本来なら「たばこ」に関連する企業は限定されており、関西を拠点としないため、資料の借用が費用の面で困難であったろう。そのように考えると、「企画に無理がある」という指摘は、もっともなことである。

JTの広報部に「企画書」を提出し、会議で検討して頂いた結果、「たばこと塩の博物館」の湯浅学芸員が私たちの展示の窓口となって下さることとなった。提出した「企画書」に記載した「展示の概要」は「たばこ班」が出発点を何を考えていたのかを再考する上で重要であろう。その内容は以下の通りである。

現代、たばこは未成年の喫煙やマナー違反などの問題が取り上げられ、マイナスイメージとともに迎えられる傾向にある。関西大学においても分煙化が進み、喫煙場所が指定され、学内では禁煙治療や禁煙相談も行われている。

しかし、たばこが移入された江戸時代から現代にいたるまでの歴史を検証すると、たばこは各時代の世相を反映し、切り離すことのできない文化を有している。特別展を開催するにあたり、私たちは改めて、たばこについて考え直してみたい。

展示では、江戸時代以降のたばこの文化と歴史を、現物資料、文献資料、統計資料によって追いたい。特に、高い喫煙率であった高度経済成長期は、その広告やパッケージも時代を象徴したものとなっており、映画作品、文芸作品、絵画との関連も深く、展示の中心にしたと考えている。その上で、現代のたばこが置かれている状況や、マナーアップへの取り組みを確認し、今後の「たばこの嗜み方」を考えてゆく材料となるような展示を行いたいと考えている。

禁煙推進の色が企画書に出れば、断られてしまう可能性があるのではないかと思い、文面に配慮した。「たばこ再考」の資料のほとんどが、JT 関連の「たばこと塩の博物館」からの借用に頼らざるを得なくなったことで、JT のマイナスになるような展示を避けようとする心理が終始働くこととなったのではないかと思う。

その上でこの「概要」をみると、資料の時代は「江戸時代以降」から「現代」であり、「広告やパッケージ」を中心に、「映画作品、文芸作品、絵画」と関連付けるという幅広い内容になっている。この時点では、焦点を絞り切れていなかったのである。

展示のイメージを明確に持たないまま、借用することのできる資料が近代に限られてしまったため、広告とパッケージを中心とした展示となった。

### 3、展示準備と役割分担

前述したように、たばこ班は、責任者を決め、作業は全員で行うという方法を採用したが、もちろん、この方法には問題点もある。作業が小さく分散し、統一感がなくなってしまうという欠点である。

また、私たちは、博物館事務室に申請しなければならない係は決めていたが、重要な「展示」の責任者を決めていなかったのである。誰が、いつ、どのような方法で展示をするか集約している人が誰もいなかったのである。「解説の字の大小、ラベル構成」の失敗はここに起因している。

さらに、「展示コーナーごとの柱が不明確」「前半との係わり方がよく分らない」「テーマがはっきりしない」という講評を受ける結果となったことも、仕事の分担方法に原因がある。

それは、時代区分毎に作業をしていたからである。例えば、私は昭和30年代前後の文学に関連する図録解説や展示解説、展示を担当した。私の主な役割は企業との交渉であったので、展示品全般については把握していたが、他の時代区分の担当者がどのように動いているのか、実はあまりよく分っていなかった。

問題提起となる最初の展示ケースと、「統計資料」が展示された最後の展示ケースの内容の詳細を知ったのは実習展が始まる2日前であった。たばこ班は「図録」と「展示」が連携できていな

いというよりは、ケース担当者毎の連携がとれていなかったのである。全体を通して、展示を確認することができないような役割分担や、時間の設定となってしまったことは、失敗であった。それに気付いていた人もいると思うが、班が「分裂しない」ということを重要視していたため、意見をぶつけあうことを怠っていたのではないかと思う。

#### 4、実習展

来館者の方の動きをみると、こちらの思惑のように観覧順序がうまくいっていなかった。たばこ班は展示方法に工夫が必要であったと思う。

しかし、粟おこし班の展示スペースから順にABCDEと提示されていたが、たばこ班はCで、Bの化粧班とDの浮世絵の間であった。Bの化粧班の順路は粟おこし班の方向にぬけ、Dの浮世絵班はたばこ班の順路の反対方向にぬけている。どちらから観覧しても、たばこ班には入らないのである。たばこ班は動線の悪さを指摘されているが、たばこ班の中だけではなく、実習展全体の順路の調整も考えなければならないであろう。

実際、来館者の方からの意見をきくと、「なつかしい」というものが大半であった。それ以外には「何が言いたいのか分からない」「並べているだけ」という厳しい意見も多く頂いた。

たばこという、極端な賛否両論があるものをテーマに選んだ割には、構成が分りにくくメッセージ性が低かったのかもしれない。「中立の立場」での展示を心がけ、たばこを再考するという、こちらの目的は伝わりにくかったのかもしれない。

講評にあるように「展示資料も存在感が薄い」という印象を与えたことは、大切な資料を貸して下さったJTやたばこと塩の博物館、個人コレクターの方に申し訳なく思うが、「たばこと塩の博物館」の湯浅氏や個人コレクターの方から、「資料を大切に扱って下さり、貸して良かった」と言ってくれたことだけは、良かった点である。

資料を生かし、広告やパッケージが中心であっても、テーマを絞った展示を行えば、マイナスイメージを持つたばこの文化的な側面を強調できたのではないかと思う。

今回の実習展を通し、一つの展示を作りあげるために、多くの人や資料がかかわり、配慮しなければならない様々な点があることを実感した。そして、それが足りなかったことも痛感した。文学館の学芸員として勤務することを希望しているが、もし、もう一度展示を企画する機会が訪れたら、この経験を思い出しながら活動していきたい。